

YOKOHAMA

第二支部だより

中区・西区・南区・港南区・磯子区・金沢区

January
2015.1 No.59

公益社団法人 神奈川県看護協会
横浜第二支部

発行責任者 杉 浦 由 美 子



ごあいさつ
明けましておめでとうございます。

横浜第二支部長 杉浦 由美子

会員の皆様におかれましては、日頃より神奈川県看護協会横浜第二支部活動へのご理解、ご協力に感謝申し上げます。平成26年は、御嶽山や阿蘇山の噴火、長野県の震災、広島の土砂災害、そして横浜でも土砂災害が発生しました。尊い命を亡くされた方々に心からご冥福をお祈りし、また被災された方々にお見舞い申し上げます。まさに災害対策、災害医療、看護の在り方を本気で考える時であり、10月に看護部長会横浜第2地区と共同開催された災害対策研修が基盤になればと思っております。

また医療介護の現場では、診療報酬改定、消費税増税に始まり、病床機能を届け出、在宅機能強化とあっという間に1年が過ぎました。看護管理者の方々のリーダーシップにより、施設一丸となってデータを分析し2025年超高齢社会に向けて施設の将来構想を協議されたことと思います。

そのような中、横浜第二支部では、様々な課題に取り組み、日々活躍されている看護職の方々にお役に立てばと考え、研修会のメインテーマを「元気になる」とし、リフレッシュ、メンタルヘルス、医療安全研修を実施しました。多くの方に関心を持っていただき、大勢の参加者で、毎回会場が一杯になりましたことを御礼申し上げます。12月開催の地域連携シンポジウムでは、原礼子座長（慶應大学教授）の司会進行で、シンポジストと参加者が一体となり、活発な意見が出され多くの学びを得て、元気になりました。今後も看護職が、元気になり、それぞれの施設にも元気の環を広げていけるような研修を企画していくことを年頭の目標とし、活動してまいります。ご支援よろしくお願ひいたします。

末筆ではございますが、役員、会員の方々のご尽力により、横浜第二支部だより平成26年度第2刊を発行できましたことを感謝し、あいさつとさせていただきます。



今年は様々な感染症のニュースが飛び回りました。
そこで感染症のトピックスについて横浜市立大学附属病院感染防御部 武田理恵さんにお話を伺いました。

感染症に関するトピックス

感染制御部 武田 理恵

2014年度、感染症といえばデング熱、エボラ出血熱が話題となりました。今回は、この二つの当院での対策を!!とお伝えしたいところですが、院内での感染対策を実施しながらの緊急事態に対し、どう奮闘したかを紹介したいと思います。

2014年8月、当院にもデング熱の患者さんが入院しました。デング熱は、蚊を媒介として起こり、通常ヒトからヒトへの伝搬はありませんが、輸血、血液製剤、臓器移植は例外となります。本来であれば、標準予防策であるため、一般病棟に入院する疾患ですが、今年度は、マスコミによる医療従事者、患者さんの不安等の影響も考え、感染症病棟の個室への入院となりました。入院後には福祉保健センターの面接もあり、個室対応で正解でした。病院にはあまり蚊はないと思いつつも、念のためベープマットを患者さんの部屋に設置はしてみました・・・患者さんは、血小板減少がみられていましたが、回復して退院されました。その後、金沢区内でデング熱疑い症例の発生がありました。この時は、金沢区内7病院と福祉保健センターは、常に感染対策において情報共有や対策を一緒に実施していたため、速やかな伝達と連携が発揮されました。

次に、現在も対応が続いているエボラ出血熱です。エボラウィルスは、血液・体液による直接的接触により感染伝搬し、現在の所、空気感染伝搬はないとされています。しかし、医療従事者が感染してしまっている状況の中、適切な個人防護具の着用なども重要です。このエボラ出血熱に対しては、日本で発生していない状況で、いつ、どのように、何を発信すればいいのか、ニュースを見るたびに唸って考えていました。マスコミ報道が過熱している時、病院としての対応を患者さんに周知したほうがいいのではないかという案もありましたが、逆に患者さんを不安にさせるのではないかという意見もあり、一度保留となりました。そんな時に、日本に疑い症例が発生したというニュース!! この時だ!と思い、一機に行動に移しました。1類感染症であるエボラ出血熱は、横浜市に連絡し、横浜市立市民病院へ移送となります。そこで、①病院入り口に、ギニア、リベリア、シエラレオネからの発熱のある帰国者への対応をポスター掲示。②電話連絡での対応、ウォークイン、診察途中での疑い症例の場合などの日中、夜間時の対応フロー図の周知。③ウォークインや診察途中でもできる限り接触する人を少なくすることと、すぐに個室で待機してもらうことの対応をとりました。患者さんの状態によって色々なバージョンの対応を考えられますが、24時間感染制御部が対応するとしたことは、職員のエボラ出血熱への恐怖、不安が多少軽減するのではないかという期待と、「この時どうするのか質問」攻撃から逃れるためでもあります・・・なるべく、色々な対応をマニュアルに落とすよう努力はしていますが、すべてのイベントを載せることは困難です。エボラ出血熱に限らず、感染症での問題があった時は24時間対応していますが、よほどのことがない限り、夜中の連絡はありません。この方法が正解というわけではありませんが、万が一の連絡先があることは職員の安心にも繋がるのではないかと思っています。

最後に、最近はこれまでにはない感染症対策を実施すること(事例)が続いています。ふと振り返ると、いつも病院の管理者の人達が理解し、支援してくれていることに気づき、その有難さを感じています。そして、実際に周知活動をしてくれる感染リンクドクターや感染リンクナース、中央部門の担当の人達の存在と協力が私のエネルギーの源です。感染対策は絶対に一人ではできません。新興感染症に限らず、どんな時も一人でも多くの人達の協力を得て、一緒に取り組んでいくことが全ての人達を守れる感染対策に繋がっていくのではないかと実感しています。

【今年度の当院笑点もどきポスター】

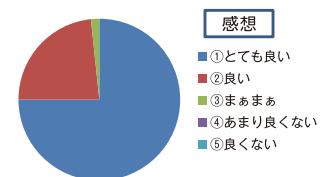
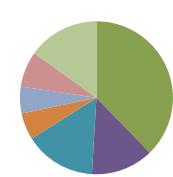
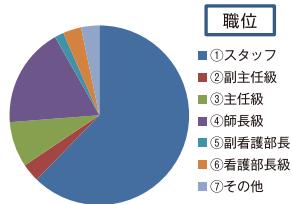
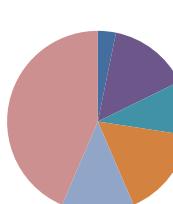


ヨッキーは横浜市大のキャラクター

研修のアンケート結果

リフレッシュ研修 「加納流 元気になる方法」

神奈川県立福祉大学大学院
教授 加納 佳代子先生

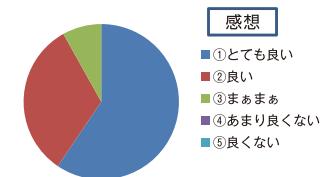
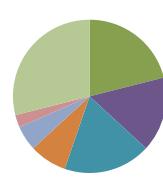
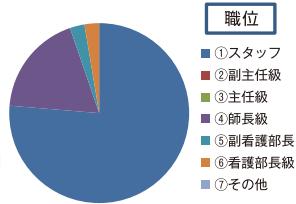
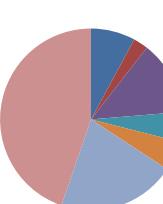


感想

- 加納先生の豊富な経験から貴重な話が聞けた。
- 自分は頭が力ちカチなタイプなので、今回の研修で気持ちが楽になった。
- 力み過ぎず、ただ適当にやり過ぎず、自分のペースで仕事を行えばいいと思いました。
- 何事も楽しくやればうまくいく！
- 今いる部署で、職場で、花を咲かせることができるよう頑張ります。
- 自分の悩みにどうとらえれば楽になるのかわかった。
- 楽しいと思うことが楽しさを作ることになることがわかった。
- 先生のお話に元気をもらえた。
- 人の不満に振り回されず、自分のありたい姿のために楽しく仕事をすることを実践していきたい。

メンタルヘルス研修 「元気になるために」

早稲田大学人間科学学術院
准教授 山薙 主輔先生



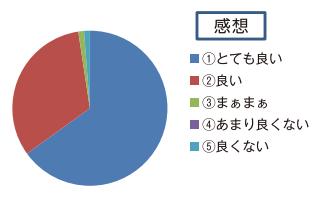
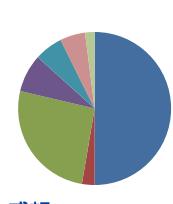
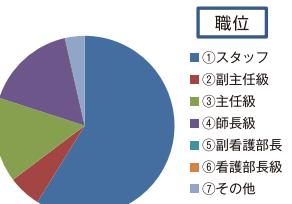
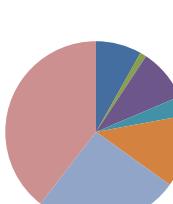
感想

- 日常的にある実体験をもとに演習できた。
- 同僚間でも活用できればと思う。
- わかりやすく実践でも活用できる内容で勉強になった。
- 職場での人間関係に悩む事が多く、この研修を受けて沢山学べた。参加して良かった。
- 今回、内容・テーマを理解し自己を振り返るという目標が達成できた。
- 話の聞き方について理解が深まった。もう少し普段の聞き方を改めたい。
- 値値観の大切さ、難しさがわかった。
- 実践を通して体験することができた。
- 話を聞く事、サポートすることの大切さを学べた。
- 新人の悩み相談等のシーンで役立つ内容だった。
- 同情になりがちだったが基礎を学べた。

医療安全研修

「エラーを防ぐコミュニケーション」 小平 さち子先生

けいゆう病院 医療心理士



感想

- 興味をそそる内容であり、講義を受けることが出来て本当に良かった。看護、普段の生活に共通して活かせる内容だった。
- 先生の専門分野に興味があった。
- 自動思考について、聞きたかった。自分のすべき思考を訂正していくたい。
- 信頼関係の成立方法が分かった。エラーが起こる過程を認識できた。
- 面白く学ばせて頂いた。
- 聞きやすく2時間があっという間だった。楽しかった。自分をよく理解したい。
- もう少し講義を聞きたかった。
- コミュニケーションエクササイズで、モデル、特に男性を選択し○○ちゃんなど再三呼んでいた。もし女性を選択したら○○ちゃんと何度も呼んだだろうか。
- 今悩んでいたことが、少し楽になつた。
- 普段の業務で起きることはばかりで勉強になった。また、仕事以外の私生活でも勉強になった。
- コミュニケーションにおいて、普段の自分の対応の仕方での良悪が抽出できた。まずは姿勢をより正していくたいと思った。
- コミュニケーションと医療安全の結びつきがとてもよく理解できた。コミュニケーションの難しさを知ることができて良かった。

地域連携シンポジウム

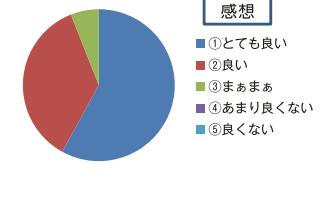
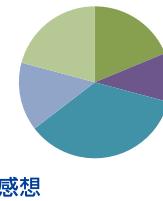
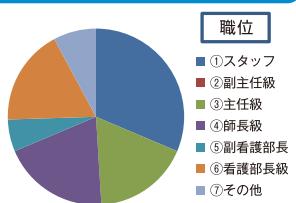
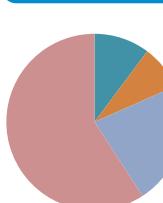
「在宅療養を支える看護～それぞれの立場から～」

慶應義塾大学 看護医療学部 教授

原 礼子先生

シンポジスト 有限会社 在宅ナースの会
横浜みなと赤十字病院
済生会南部訪問看護ステーション

小菅清子様
堀口さやか様
星野早苗様



感想

- それぞれの立場で在宅療養支援や連携を学べた。(多数)
- 実際の声が聞けて良かった。
- ディスカッションが充実していて良かった。(多数)
- 在宅看護の現状がわかった。(複数)
- 複合型サービスについて知ることができた。(複数)
- 行政や法律の知識も必要と感じた。
- 医師や多職種を巻き込んで、早期退院支援を意識していきたい。
- 行政の参加があると良い。
- お互いの立場を理解し合う場として意味があるシンポジウムだった。
- 顔の見えるシンポジウムと感じた。
- シンポジストの発表時間をもう少し長くとっても良いのでは。
- 半日かけて行っても良いのでは。(2時間では短い)
- 在宅療養するがん患者や認知症等、テーマをしづつやってみたい。
- ディスカッションができる、話し合いができるシンポジウムはとても良いと感じた。
- 座長の進行がよく活発な意見交換ができるよかったです。

施設紹介

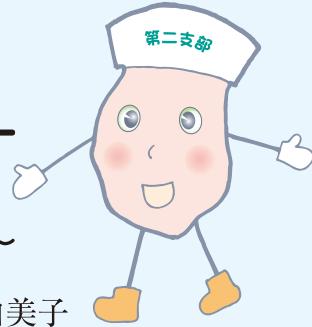
今回は先日新病院がオープンした
神奈川県立精神医療センターをご紹介します。



地方独立行政法人 神奈川県立病院機構 神奈川県立精神医療センター

～12月1日 二つの病院を統合し、
新病院に生まれ変わりました～

副院長兼看護局長 尾花 由美子



昭和4年に創立された、精神科単科の芹香院（芹香病院）と昭和38年に創立された依存症専門のせりがや園（せりがや病院）を、移転・統合し「精神医療センター」となりました。新しい病院のコンセプトは、「ふきぬける風とみどり」です。患者さんにとって、居心地の良い

療養環境と治療に専念できる安全性を考え、機能性と色彩や温かさにこだわりました。

これまで、各病棟や療法部門が分かれ、点在している状況でしたが、5階建ての免震構造の建物になり、病棟機能（病床数323床）も再編いたしました。



新病院概観

5階	A(救急)	B(救急)
4階	A(高度ケア)	B(思春期)
3階	A(地域移行支援)	B(ストレスケア)
2階	A(身体ケア)	B(依存症)
1階	外来(歯科)・検査・相談・訪問・OT・DAY	

F棟(医療観察法)

療法棟(体育館)

新病院病棟・外来等

これに先駆けて、平成24年に「医療觀察法病棟」を開棟しています。新病院では、12歳～18歳を対象にした思春期病棟が開棟になり、「せりがや学級」も開校する予定で教育環境も整いました。

病院の理念である『私たちは、こころの健康を支え、質の高い精神医療を提供します。』を踏まえ、看護局は、『患者さんに寄り添い、自己決定・自立を支援し、患者さんと共に可能性にチャレンジします。』をミッションに掲げました。入院期間を短縮し、地域生活を支えるための多職種との共同や地域との連携を強化し、患者さんの願いを実現したいと思います。

また、窓口を広げ、いつでも相談できる病院になりたいと考え、外来にインターネット予約を導入しました。ストレスケア病棟では、以前からの取り組みをさらに広げ、公開講座や病棟見学、職場や大学へ出向いての相談を強化していきます。依存症病棟では、中学校や高校への啓発活動を継続し、未病の取り組みをしていきます。救急バスも活用が本格化し、患者さんと医療者が治療やケア、退院の方向性を共有できるようになってきました。

今まで大切にしてきた看護をさらに発展させ、新たな取り組みにチャレンジしていきたいと思います。

伝言板

看護協会・横浜第2支部への
要望・意見等を下記に頂けます
ようお願いします。

〒231-0037

横浜市中区富士見町3-1

TEL:045-263-2901

FAX:045-263-2905

Mail:kanakan1@basil.ocn.ne.jp

編集後記

今年度は、新支部長の下「元気になろう」をテーマに様々な研修を企画いたしました。煩雑な業務を抱え慌ただしく時間が流れ…そんな日々の中、研修会で明日も頑張ろうと有意義な時間を過ごして頂けましたら役員一同嬉しく思います。今後も皆様のお役に立てる支部活動を目指す所存です。

今後の支部活動予定

・平成27年2月19日(木)

看護研究発表会

(7題の発表予定です。)

